

2024年 5月

マナ通信



今月のマナ通信

- ◎ 日々のみことば3月号：マルコの福音書、他
- ◎ ローマ人への手紙：ロマ書3:29-4:12講解 からの感想です。

I 約聖書には、やがて救い主メシヤが現れることが数多く預言されています。それはダビデの家系から出ると預言されて、皆が待ち望んでいたのです。預言者は神の声を聞いていました。神は自ら自分の存在を預言者を通して啓示していたのです。福音は父なる神が計画し、子なる神が実行し、聖霊なる神が適用されたものと聞いています。

イエスはこの世に来られました。イエスの教えは我々罪人の予期せぬものでした。支えられる者ではなく支える者になれと教えています。実際、弟子たちの足を洗っています。12弟子をとりましたが漁師、取税人たちでした。イエスは云ってます。わたしに従って来なければ、自分の十字架を背負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。

しかし、福音の伝道の為集められたイエスの11弟子も従うことが出来ませんでした。それは、最後の晩餐も終え、ゲッセマネの園での出来事です。イエスは苦しさの余り父なる神に祈ってます。その間、弟子3人はイエスの「目をさまさない」という命令に従えず、夜なので眠さに勝てず3回とも寝てました。

その後、ユダに導かれ剣や棒を手にした群衆が来た時、弟子たちは逃げてしまいました。やはり人間は罪人で自分の思ったように行動します。イエスほど神と人間の間で立ち苦しめ、惨めな思いをした人は無いと思います。しかし、目立たず名もない人の中にはイエスのことを理解していた人もいたのです。

過越の祭の二日前にイエスの頭に高価なナルドの香油を注いで愛と献身を示したベタニアのマリア、そしてまた、イエスが墓に葬られた後、イエスに香油を塗りに墓に行った3人の女の人はやはりイエスは神であることがわかっていました。信仰は知識や、考えられた結果はむしろ害になるのです。神に仕えるにはこのように幼子のような無邪気な気持ちでなければ神は受け入れないことを改めて知りました。

人間は全てアダムにあって罪人です。人間の始祖にある罪は我々の罪でもあるのです。我々も一人一人アダムの中にいたのです。この事実の認識は、イエスの罪の贖いを信じる人は全て救われることと同一であり、イエスを第二のアダムと云われていることのゆえんです。原罪をもつ人間は悪魔の誘惑に反応し罪を犯します。悪魔は人間の快樂、利己主義、傲慢に対してつけ込みます。ましてや、イエスの御霊をいただき、イエスの側についた者には敵として目をひからかせています。悪魔は人間の手、足、目、耳、鼻等、体を通して罪を働かせるのです。

神様は人間の創造主、生みの親です。そういう人間の姿をみて非常に悲しんでおられました。けれども、神の性格上人間の犯した罪を罰しないわけにはいきません。苦しみに耐えていた神は行動に出ます。そこで、神は愛するひとり子をこの世に送り我々の罪の身代わりとして死なれるようにされたのです。そして、イエスは埋葬され、三日後に復活し、その後昇天されました。ここに神の底知れぬ愛があります。神を崇め、慕いこころをウキウキ、ワクワクさせなければなりません。イエス様は父なる神から託された仕事を、その謙虚さと従順のゆえに人類の救い主となって下さったのです。そして復活された後、聖書は次のように教えてます。

「その後イエスは、十一人が食卓に着いているところに現れ、彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった。よみがえられたイエスを見た人たちの言うことを、彼らが信じなかったからである。それから、イエスは彼らに言われた。『全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばで語り、その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。』 主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」

(マルコ16:14-20)



マルコの福音書はキリスト教を探求する人にとってはここが出発点です。そこには、イエスの生涯、死、復活が説明されています。その目的は、イエスは一人の人である一方で、一人の人をはるかに超えた存在、全人類を救済するために来た神ご自身であったということです。(畑中伸之)

聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります。(ロマ4:3)

パウロはロマ書4章で当時のユダヤ教のアブラハム解釈とは全く違った信仰義認論を持ち出しました。信仰義認の教えは、旧約聖書の教えと矛盾するところか、一致すると述べます。

墮落したユダヤ教では、人間の善行による救いを教えていましたし、彼らは必ずアブラハムを例証として持ち出して来るに相違ないからです。当時のユダヤ教の考え方を表している旧約外典には、アブラハムはその行いによって義と認められたと記されているからです(Iマカベヤ2:52)。

パウロはここに当時のユダヤ教のアブラハム解釈とは全く違った信仰義認論を持ち出します。しかも彼は創世記15章6節を拠り所として、論証をしています。

「というのは、聖書は何と言っているのか。『アブラハムは神を信じた。それで、彼は義と認められた。』」

パウロも、かつてはガマリエル門下のユダヤ教徒として、アブラハムの行いによる義認を徹底的に学んだはずです。それなのに、彼はいったい、いつ、どのようにして信仰義認という解釈に変わったのでしょうか。

パウロは、パリサイ派の学徒として、ガマリエル門下の優等生として、そこで学びを終え、その信仰から、教会やクリスチャン迫害に向かいます。彼がそうしている時、ダマスコ途上でキリストに出会ったあの時、パウロは主から直接、新しい啓示を受けました。そのことについては、ガラテヤの諸教会への手紙の中に記しています。

主イエス・キリストご自身、善行による義認の教えを持っておられませんでした(ルカ18:14)。また、イエス様はこうも言われました。「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです」(ヨハネ8:56)。

これは、アブラハムが行いによって義と認められたのではなく、キリストの時代の人々と同じように、信仰によって義と認められたことを語っておられます。

この信仰義認の教えは、人間に誇りを与えないもので、つまり、信仰義認というのは、信仰の力で救われるというのではなく、信仰に何か力があると考えず、信仰すら神からの賜物として与えられるものですし、信仰を通して、神様が恵みとして救ってくださるのだということを深く教えられました。

(福島三弥子)



マルコ10章17節~22節の、このお金持ちの人の事について、今までと違うことに気が付きました。

もともとこの人も17節にありますように、それなりに永遠の命について、関心を持ち、イエス様に質問しています。この人が救われるために唯一欠けているのは、有り余る富を貧しい人に全て施しなさいという、イエス様のご命令でした。

このご命令に従えなかったのです。単純に富に執着しているのか、富というものに依存しているのか、両方かもしれません。

アブラハムのイサクをさえささげようとした信仰を思われまされた。すべては主からの賜りもの、恵みと口では言っても、いざとなると手放せない、握りしめる自分の醜さを、恥じています。

46頁の解説文にある“自己満足という従順”という言葉でピタリと表現されると、自分にも当てはまると、思い至ります。

見せかけの従順や謙遜を、言っています。混じりけのない謙遜と従順を、身に着けていけるように御言葉により、成長、成熟を、目指していきたいです。(広瀬裕子)



人は善行を積み、罪が償えると思っています。ところが神は、「血を流すことがなければ、罪の赦しはない」と言われ、どんな小さな罪にさえ死を要求されるようです。この価値観の違いは驚くべきことです。

そうであれば、ほとんどの人は死ななければなりません。ところが、それらの人の罪を負って、主イエスは十字架で死なれたというのです。それを自分のためだったと信じるだけで、罪を赦されるというのですから、これまた驚きです。

しかも、こんなちっぽけな自分、と思うのに(罪が死を要求するほどの重いものだということですが)、そんな自分を赦し生かすために、神のひとり子を犠牲にするなんて、神様は考えられないほどの犠牲を払ったのです。

このように二重三重に驚くべきことを神様はなさってくださいました。それを信じる事が出来たのがクリスチャンと言われる人たちです。信じることでさえ、神様からの頂き物のように思います。心から感謝します。(高橋美枝)

すると、農夫たちは話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる。』(マルコ12:7)

ぶどう園の農夫たちはとても浅はかで愚か者でした。主人がぶどう園のすべてを造り、農夫たちはそれを借りてぶどうを育てているのに、その立場を全く理解していませんでした。貸主に対して借り賃の収穫物を収めるどころか、つかいのしもべたちを打ちたたき、殺しました。拳句のはてに、ぶどう園の主人の息子がつかわれたとき、彼を殺せば相続財産は自分のものになると考えたのです。

解説によると、この悪い農夫たちはユダヤ人のことです。彼らは神様から選ばれた民で、この地上で神様のみこころにかなう生き方を示された民だったのですが、自分たちの都合の良い考えを持ち込んで、神の本来のみこころにそぐわない生活を送っていました。

彼らの霊的な目は見えなくなっており、ひどい近視眼になっていたようです。「ぶどう園の主人の息子を殺すなんて、どうしてそんな愚かな考えが浮かぶのか。息子を殺せば、主人が直ちに怒って農夫たちからぶどう園を取り上げるのは目に見えている。」と読み手の私は思います。

しかし、「主人(=神様)はいることは分かっているが、目の前のぶどうは自分が育てたんだ、これは自分の自由にしてよいのではないか」と愚かにも思ってしまうのが生まれながらの人間の姿なのです。

自分にもそんな面があると自覚するとき、失望しそうになりますが、主イエス様はそんな私たちのために十字架の死と復活を通して、人間自身の力によらない救いのわざを成し遂げてくださり、さらに聖霊様を通して聖化のみわざを私たちの上に成してくださいます。感謝します。(永井亮子)



働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。

同じようにダビデも、行いと関わりなく、神が義とお認めになる人の幸いを、このように言っています。『幸いなことよ、不法を赦され、罪をおおわれた人たち。幸いなことよ、主が罪をお認めにならない人。』

(ロマ4:4-8)

聖書が教えている救いの福音は、私たちの善行に対する報酬なのではなく、ただ神の恵みによるものです。

神が不敬虔な私たちを義と認めてくださるのには、そこに確かな裏づけがあります。キリストが私たちの罪の支払うべき値である死を引き受けて下さったということ。この確かな裏づけによって、神は不正をなさったのではないことが明らかです。

神は不敬虔な者を、どのようにして義と認めてくださるのか、それは、キリストが十字架で成し遂げてくださった義の着物を私たちが信仰によって着る時、そのキリストの義を、私たちの義と認めてくださるのです。私たちがキリストを信仰によって受け入れるというのは、キリストの義の着物を着るということであり、神はそのキリストの義を、私たちの義と認めてくださるのです。

信仰義認には、3つの事柄があります。その1は、キリストの功績の転嫁。キリストが十字架で律法の要求どおり、罪の償いをしてくださったことを、信じる者たちのものとみなしてくださるということ。

その2は、刑罰の免除。キリストが十字架で、私たちの身代わりに、私たちの罪の刑罰を受けて下さったので、私たちはもはやその罪の刑罰を受けなくてもよくなったこと。その3は、罪のために失われてしまった神の祝福の回復です。神を神として崇めもせず、神を神として認めない不敬虔な私たちのために、神はこれだけのことをしてくださったのです。この救いが恵みでなくて何でしょう。

ダビデは、罪を隠していることの苦悩を述べています。「私が自分の罪を言い表さなかった時は、一日中うめいていたので、身も心も疲れ果て、あなたの御手がいつも心に重くのしかかり、私の力はなくなってしまった。」(詩32:3-4)

神が求めておられるのは、神の御前に自分の罪を素直に認め、神のあわれみにすがること、神は私たちを罪から救うために驚くべき犠牲を払い、御子イエス・キリストによる贖いを成し遂げて下さったのです。神のあわれみにすがり、恵みによる救いに入れていただく以外にはありません。大変ありがたいことです。

(木村邦夫)



聖書は、そのことについて「すべての人は、罪を犯したので、神の栄光を失ってしまっており……」と教えております。それにもかかわらず、人間は何かをして、それによって救われようという考えを捨てようとはしません。ですから、聖書は繰り返し、そのような間違った考え方を打ちこわすために、神の恵みのみによる救いについて教えているのです。[ローマ教会への手紙]より

救いは、自分の行いによるのではなく、神を信じる信仰によって義と認められることを改めて教えていただきました。ただただ神の恵みによって生かされていること、導かれていることを覚えます。(外處トミ)

年老いた 母の姿を 思う度
主なる神様 救ってください
2024年3月31日



群馬県前橋市大室公園の桜

働く者の場合に、その報酬は恵でなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」(ローマ4:4,5)

神様は私たちの行いによってではなく、ただ恵みによってわたしたちを信仰によって義と認めてくださるとおっしゃられます。神様が私たちを気にかけてくださるとはなんと感謝なことでしょうか。今日も神様の恵みに感謝します。(外處光歩)



として自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです」(1ペテロ2:24)

神様が無限の愛といつくしみによって、私たちに救い出すためにご自分の御子をこの世に遣わしてくださいましたこと、私たちが救われるのは、神様がイエス・キリストの義によって私たちに義と認めてくださるからであることを覚えて感謝いたします。自分を眺めたり、自分に頼ったりすることなく、主だけを仰ぎ見、主だけにより頼んで歩いていけたら幸いです。(外處結実)

働きも無い者が、不敬虔な者を義と認めてくださるお方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」(ロマ4:5)

この御言葉に書かれている「何の働きも無い者」とは私のことです。そして、「不敬虔な者」も私のことです。私たちは今なお、自らの罪の中にあるが、神は私たちに正しいと見なして下さっている。神は私たちに、信仰を通してキリストの義を与えておられる。

「義認」は聖化について全く考察していない。ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、値なしに義と認められる。それが道である。と明言されています。

そして、「救われる者とは、キリストだけを仰ぎ見て、キリストを喜ぶ者たちである。」とも著者は語ってくれています。そこにすがるしかない自分がいます。その真理に唯一の救いがあることを確信し、ただ、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、私たちの神である主を愛する者となることを目指したいと心の深いところで覚えさせられました。(外處徳昭)

とれでは、肉による私たちの父祖アブラハムは何を見出した、と言えるのでしょうか。もしアブラハムが行いによって義と認められたのであれば、彼は誇ることができません。しかし、神の御前ではそうではありません。聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります。」(ロマ4:1-3)

私は以前、「アブラハムは信じた。それが神の義とみなされた」との聖句を、アブラハムは敬虔な人物だった。神を恐れる人物だった。敬神の念に富む人物だった。神に従うこと、神から告げられた通りに行くことを喜びとしていた。そして、そのような人物だったので、神はこのようにアブラハムを取り扱われた。それが信仰による義認だと、ある注解書で教えられていました。

と言うことは、私たちは、行いによって義と認められる。善良な人間だから救われる。敬神の念に富んでいるから、祈りを唱えているから、信心深いから救われる、となります。これは、純然たる「行いによる救い」にほかなりません。大変な誤解です。

今回の復習の学びで、「義認」について誤った理解が正されました。以下にロイドジョンズさんの説明を記させていただきます。

「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」と聖書が言う時、それはこういう意味です。アブラハムが義と認められたのは、私たちがいま義と認められるのと正確に同じしかたによってである。

神はアブラハムに現れて、こう仰せになった。「アブラハムよ。わたしはあなたと契約を結ぶことにしよう。神は、アブラハムと偉大な契約を結ばれました。ご自分の贖いの道に関する偉大な約束をお与えになりました。神は言われた。「あなたを……そして、あなたの子孫を通して、地のすべての国は祝福される。わたしはあなたの子孫を大いに増やし、あなたとあなたの子孫を通して全世界を祝福しよう。」

言葉を換えると、神はアブラハムに向かって、主イエス・キリストについて語られたのです。神はアブラハムに向かって、イエス・キリストにある救いの道を告げられた。

このお方は、神がお告げになった通り、アブラハムの子孫から生まれることになっていた。創世記15章、16章、17章を読めば、そうしたすべてがそこにある。

しかし、パウロはそれを、このロマ4章のこの箇所で言い表している。13節「というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰

の義によったからです」。

それから、17節、18節に注意する。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした」と書いてある通りに……このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方の御前で、そうなのです」。

使徒は何に言及しているのでしょうか。「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、『あなたの子孫はこのようになる』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした」。神は、アブラハムが99歳の時にやって来て、こう言われた。あなたとサラから、――そのサラは、老女となっており、とうの昔に子どもを生める年ではなくなっていたが、――究極的にはメシヤが生まれることになるのだ、と。神は主イエス・キリストにある贖いの計画を告知された。そして、アブラハムはそれを信じたのである。

それだけではない！ イサクを犠牲としてささげる事件において、神はそれを再びアブラハムに啓示された。神はアブラハムに、《十字架》上で成し遂げられる死の予表を与え、ご自分がいかに人間を贖うことになるかを示された。もちろん、アブラハムはそれを完全には理解しなかった。

しかし、主ご自身が何と仰せになったか覚えているであろう。「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです」(ヨハネ8:56)。それが、主イエス・キリストご自身のおことばである。

それゆえ、この「アブラハムは神を信じた」という語句を読む時、次のように思い込んではいけません。それは単に、アブラハムが神を信じていて、神から命じられたことを行っていたということなのだ、と。それは、そうしたことをはるかに越えている。

アブラハムは、私たちのように、神の贖いの道を信じた。明確にはなかったが、「はるかにそれを見て」いた(ヘブル11:13)。そのことは、今やすでに起こったこととなっている。その満ち満ちた豊かさすべてにおいて現されている。

しかし、アブラハムはそれを、はるかに見ていた。それが起こる約二千年前にそうしていた。そして後にはダビデも正確に同じようにした。これは、神の救いの道を信じることを意味する。それは、はるか昔の創世記の中にあるのである。

この「信じる」という用語は、そうしたことを含むものとされなくてはならない。さもないと、私たちの主のあの言明には何の意味もなくなってしまふ。――「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです」。言葉を換えると、アブラハムは私たちと正確に同じしかたで信仰によって救われたのである。――行いなしに、何の功績もなしにである。

アブラハムは、自分の救いが全く、やがて来たるべき神の御子の功績に存していることを見てとった。その方こそ、肉によればアブラハムの子孫から、また、ダビデの子孫から、出ることになっていたのである。

これが、いかに旧約聖書の全体に光明を投じているかが分かる。それは、この恵みと贖いの契約が単一のものであることを示している。アブラハムはそれを見てとった。自分をそれにゆだねた。それがアブラハムの救いの手段であった。アブラハムは、この義こそ、神が自分に与えようとしておられるものであると見てとった。――だから、誇りは全く取り除かれているのである。

「アブラハムは神を信じた」と告げられる時、それはアブラハムが、救いの道をこう理解されたという意味にほかならない。神の救いの道は、行いによるものでも、律法によるものでも、割礼によるものでも、こうしたいずれによるものでもないのだ。

神が、その御子の義を私たちに転嫁し、信仰によってそれを見てとらせてくださるとのことなのだ。それは、信仰を介して私たちのもとにやって来る。だが、その義はイエス・キリストの義である。

以上の解説ではっきりしました。神様の救いは旧約時代も新約時代も1つであって、信仰によって義と認められるのです。旧約時代の人々は、どのようにして救われたのかと言うと、アブラハムは、キリストを待望して救われました。旧約時代の人々も、キリストの贖いによって救われ、新約時代の人々も、キリストの贖いによって救われるのです。

旧約時代の人々は、キリストの贖いを待望する信仰によって救われました。それに対して、新約時代の私たちは、すでに成就されたキリストの贖いを信じて救われます。どちらも信仰によって救われるという点では全く同じです。何と感謝なことでしょう。(福島島)

貴重なご感想をありがとうございました。
 次回は「日々のみことば」4月号か「ローマ人への手紙」(4:13~ロマ5:2)からの感想を5月10日までに福島兄弟にお寄せください。(畑中)

